

令和3年4月26日

ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の
連携プロジェクトチーム第3回会議 議事録

○山口虐待防止対策推進室長 それでは、定刻となりましたので、ただいまから「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム」第3回会議を開催いたします。

司会を務めます、厚生労働省子ども家庭局虐待防止対策推進室長の山口です。

本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、公務の都合により、丹羽副大臣が遅れて参加しますので、副大臣からの御挨拶と頭撮りはその際にまとめて行いたいと思います。

今回につきましては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、ビデオ通話アプリを活用し、オンライン環境併用の形式を採用しております。

また、今回の検討会は、傍聴希望者向けにYouTubeライブ配信を行っております。傍聴されている方につきましては、配信画面の録画・録音はお控えいただきますようお願いいたします。

それでは、資料の確認をさせていただきます。

資料1「宮崎成悟氏説明資料」。

資料2「精神疾患の親をもつ子どもの会『こどもぴあ』説明資料」。

資料3「藤木和子氏説明資料」。

資料4-1と資料4-2が「尼崎市説明資料」でございます。

本日は、Yancla株式会社代表取締役の宮崎様。

精神疾患の親をもつ子どもの会「こどもぴあ」代表の坂本様。

NPO法人インフォメーションギャップバスター理事・弁護士の藤木様。

そして、尼崎市教育委員会事務局学校教育課こども教育支援課スクールソーシャルワーカーの黒光様。

尼崎市こども青少年局こども青少年部こども青少年課係長の江上様よりお話を伺います。

まず、皆様から一括して御説明いただきまして、その後に質疑応答を行いたいと思います。

それでは、宮崎様から御説明をお願いいたします。

○宮崎氏 よろしくお願ひいたします。

資料の1ページ目です。今日なのですけれども、僕は支援者としての意見と当事者としての意見というところで、すごくいろいろと考えたのですが、あくまで個人的なお話として、僕が今まで考えてきたこととか、いろいろな支援をしてきた人たちの御意見とかを集約して資料を作ってきましたので、よろしくお願ひいたします。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきますと、十五、六歳から現在まで難病で寝たきりの母の介護をしながら生きてきました。いろいろとあったのですが、就職して、介護離職も経験したりして今に至っているのですが、2年前ぐらいからYancle株式会社という会社を立ち上げまして、ヤングケアラーの就職・転職支援と当事者同士のオンラインコミュニティをつくってやってきました。

ただ、ちょっと事情がありまして、最近は就職・転職の支援は一旦ストップしていて、今はコミュニティ活動に専念しながらやっております。

次のページをお願いします。なので、私自身のヤングケアラーとか若者ケアケアラーとの関わりでいいますと2つありまして「オンラインコミュニティ」は、slackというオンラインのチャットツールを用いたコミュニティをつくってしまして、今、参加者が約150名程度で、日々コミュニケーションを取っております。皆さんに日々の悩みだったりつぶやきを投稿していただいて、時々Zoomとかでこういった形でオンライン会合みたいなものを実施して、当事者の方々とお話ししております。

もう一つなのですけれども「就職・転職支援」は、今はストップしているのですが、介護と仕事で悩む若者の就労支援をしていました。これまで約100名程度の方々の仕事で困っている話を聞いて、それを理解してくれるであろう企業とおつなぎするみたいな活動をしておりました。

ただ、そこで感じた課題が、企業の介護に対する無理解をすごく痛感しまして、会社が介護をしている状態の若者をなかなか受け入れない体制をすごく痛感したので、ここを変えていく必要があると僕は思っております。

次のページをお願いします。恐縮なのですが、ここから僕のお話をさせていただきますければと思っております。

15歳の頃から、多系統萎縮症という神経系の難病の母の介護をしてきました。15歳からなのですけれども、あるとき、母の異変に気づきまして、母が運転中に目まいがひどくて、事故りそうになるということを車に乗っていて感じて、そこから母のサポートが必要だなと思い始めたのがきっかけです。そこから徐々に車で送り迎えとかもしてもらえなくなりましたし、お弁当を作ってもらうこととかもできなくなって、あれ、何で自分だけ台風の日も、嵐の日も、誰も迎えに来てくれないのだろうみたいなものを感じた記憶があります。

16歳の頃、高校生になってからは、買い物とか病院への通院の付添いといった簡単な日常的なケアをしていました。その辺りから自分の服は自分で洗濯したり、当然なのですが、食べた食器を片づけるとか、生活に自立が求められてきました。

17歳、高校2年生のときは、その頃から母が一人では生活できない状態になりまして、実家が一軒家なのですけれども、家の中の階段の上り下りを補助したり、料理とかの家事とかほかの生活全般のサポートをするようになりました。このあたりから母の病気に診断がついて、暗くなってしまった母の精神的なケアみたいなところもやらざるを得ない状態でした。

18歳、高校3年生なのですけれども、この頃からは母が寝た状態から起き上がれないとか、ソファーに座ったらそれきり一日そこに座っているという状態になってしましまして、夜に僕が母の隣に寝て、夜中に母をおぶってトイレに連れていったりとか、ずっと気にしなければいけない状態で、僕自身も部活をやっていて朝練とかもあったので、結構ハードな生活をしていました。時には部活を休まなければいけないこととかもあったりという状態になりまして、僕がちょうど大学受験を終えたあたりで母が朝目覚めなくなりまして、そこから気切を入れて、ほぼ寝たきりの状態になりました。

19歳は、喀たん吸引や車椅子への移動の補助、日々の食事、投薬とかをずっと続ける本当に介護漬けの生活が始まりまして、受かったのですけれども、大学進学も一旦諦めて介護に専念することにしました。高校卒業後、1年間介護をずっとやって、その翌年に、姉もいますので、サポートを受けつつ、介護をしながら受験勉強に励みます。

その後、大学に進学しました。ただ、介護と講義の予定が合わずに、全然大学に通学することができなくて、1年生のときは年間8単位しか取れないみたいな状態になりまして、もちろん、サークルとかバイトとかもほぼできないので、ずっと介護をしているという状態でした。

大学2年生で、家族でうまくやりくりして大学に通い始めるのですけれども、今度は通い始めたら通い始めたで周囲との違いにさいなまれて、周りは留学したり、アルバイトをして、サークルをして、部活をやってとか、自分の時間を自分のために使っているのですけれども、僕自身は、自分の時間は、最低限大学に行くのと介護に費やすしかできない自分にコンプレックスというか、フラストレーションを感じていたような時代です。

大学3年生から、幸い、弟が大きくなりまして、介護を手伝ってくれるようになりまして、そこから大学に通い始めます。

24歳は、就職活動をするときに、大学時代は介護しかしていないので、就職活動でも介護をしましたという自己PRが全く通用しない状況で、本当に苦労しました。大学のキャリアセンターに行っても、あなたがサボっていただけでしょうみたいな感じに言われた覚えもありますし、本当に介護をしているという生活が受け入れられない世の中なのだなと感じました。

そこから幸い、就職が1社決まりまして、そこに進んだのですけれども、3年で実家の介護が大変なので、介護離職をするという人生を歩んでまいりました。

次のページをお願いします。僕がここでお伝えしたかったのは、ヤングケアラーの人生は18歳以降も続いていくなと思っているのです。なので、ひとえにヤングケアラー支援といっても、その先のことも考えてあげないと適切な支援はできないのではないかと僕は思っています。

こんな感じでライフステージごとに抱える悩みや課題は異なると思っていまして、高校生までは、僕みたいに部活や遊びになかなか参加できなかったり、勉強する時間がないとか、友達に相談できない、あとはよく分からないけれども、何となくつらいといった方が

多いというイメージです。本当に多様な存在なので、たくさんの思いを抱えた方がもちろんいるのですけれども、僕が思うのはこういう感じでした。高校卒業後は、学校に行く時間がないとか、アルバイトをする時間がない、でもお金が必要とか、後は部活動とかサークル活動みたいな本来、大学生が当たり前に行えることができないことにコンプレックスを感じるとか、友達に相談できないといった方が多いのかなど。僕自身がこういう感じでした。

社会人になってからも、入社するとき全国転勤ができないという前提ですし、介護との条件に合わなければ、やりたい仕事もできないという状態です。あとは介護を理由に仕事を休めないとか、上司の方に理解してもらえないというのも、すごくいろいろな方から聞きます。

次のページをお願いします。話は変わりますけれども、いろいろな方からヤングケアラーの課題は何かと聞かれまして、これもあくまで僕の意見ではあるのですが、若ければ若いほど自分の置かれた状況の説明が難しいなと思っていますのです。僕自身も、高校生のときに何に困っていたかと言われても、明確にこれに困っていたみたいなことは説明できなくて、そもそも僕自身が親の介護をしていたという認識がなかったのです。

なので、3つに分かれるかなと思っていますのですけれども、一つは、自分が介護をしているという認識がない。家族の手伝いとして当たり前に行っているという認識がある子が多いという印象でした。僕自身もそうでした。

もう一つが、介護をしていることは分かっているけど、その悩みをうまく言語化できない。何がつらいかというのを適切に大人に伝えられないとか、何となくふわっとつらいけれども、まあ、いいかみたいな子がいたりとかするような気がしています。

もう一つが、漠然とした悩みがあるが、特段つらいとは感じていない。僕自身もそうだったのですけれども、家族のサポートを嫌々やっているわけではないので、そこまで悩んでいないのですが、身体的なつらさはあったり、僕の話でいうと、夜中に母をトイレに連れて行って、朝5時に起きて部活に行くとか、知らぬ間に体がむしばまれていくような感覚がある子はいないのではないかという僕の考えです。

次のページをお願いします。なので、ケアのレベルによって支援が異なるというふうはこちらの考えを記載させてもらったのですが、縦軸にケアの負担度と通学の可否を書いたときに、通学不可の方は必ず支援が必要だと思っています。

2つのパターンがありまして、家族のサポートもなくて、その子がやらなければいけない、通学できない場合は、確実に支援が必要で、いろいろな家族のサポートがあるのですけれども、徐々に通学できなくなっているみたいな、ケアの負担はそこまで重くないけれども、通学ができなくなりつつあるみたいな下の子も支援が必要だと思っています。

一方で、僕みたいに家族の支えとかもあって、介護をしながらも通常生活できている状態、部活にたまに参加できなくなったりとか、もちろん、そういうものはあれど、普通に生活できている、何となくつらいみたいな方と、学校に行けない方の支援は、また異な

るのではないかと考えています。

次のページをお願いします。それをさらに具体的にいいますと、学校に行けない方は、福祉へのアクセスができていない人が多いのではないかと考えているのです。一方で、僕みたいな人は心理的ケアが必要だと思っています。なので、早急に福祉につなげる必要のある人と、心理的ケアを必要としている人に分かれるのかなと思っています。

福祉が必要な人は、現状の体制では明らかに通常の生活ができていない状態です。そばにいる大人が非協力的であって、子供自らが福祉と連携を取る必要があるが、それができていない状態。これまで関わってきた中で何人かいたのですけれども、例えばお母さんが高次脳機能障害なのですが、全く福祉とつながっていなかったりとか、統合失調症でアル中のお父さんがいたのですけれども、その方も医療とつながってなくて、何の診断もついていないといった方のお話も聞いたりしました。なので、そういった方には、すぐにでも福祉につながって、社会的なサポートをしてあげる必要があるのではないかと考えています。そのために、支援として、学校の先生とソーシャルワーカーがちゃんと連携を取って、ヤングケアラーを発見して、福祉とつないでいく必要があるのではないかと考えています。

もう一方が、心理的ケアの必要性です。僕みたいに家族のケアをしながら普通に生活をしているのですけれども、友達と遊べなかったり、部活を休んだり、学校生活に少々支障を来したりしている人とか、家族のケアをしている方とって、具体的に何がつらいのかが分からなくて、でも、孤独感とか寂しさを抱えながら生活している人に対しては、近くにいる信頼できる大人が相談に乗るとか、子供の心理の専門家が相談に乗るといった信頼できる相談先が必要かなと思っています。

続きまして、若者ケアラー、18歳以上の方々は、僕がコミュニティーで連携を取るといえるか、コミュニケーションを取る人が結構多いのですけれども、共通する悩みとして3つあるかなと思っています。

一つが、相談相手がないことによって孤立している方が多いです。これはヤングケアラーも一緒だと思うのですけれども、若くして介護をしている人が身近にいないので相談できないとか、年齢の離れた大人に話しても、なかなか理解していただけないという問題があります。

もう一つが、仕事との両立に関する不安です。介護による時間的制約によって仕事との両立が難しくなったり、終わりの見えない介護という制約がある中で、自分の将来のキャリアプランが描けなかったりといった不安があります。

もう一つが、2番とかぶるのですけれども、将来的な生活の不安です。結婚や出産とかをする上で悩ましいとか、実家を出ることを決断できずに悩んでいる方、家を出たら家族が死んでしまうのではないかとこの悩みを抱えている方がいます。介護による出費もあるので、お金の不安があるという方も多いです。

これは会社をつくる上で、事業計画でつくったものなので、仕事の悩みに寄ってしまう

ている部分があるのですけれども、当事者にヒアリングをしたことがありまして、両親のケアで悩んでいることとして、就活が進んでいない、学業との両立が難しい、気がめいってしまうとか、感情的になったり、学業に手がつけられなくなったり、今後は心配、先が見えない、就職や相談相手とか、友達に共感してもらえないといった悩みが多いという印象でした。やはり仕事の不安とか長期的に見た将来の不安といったところを心配されている方が多いという印象です。

次のページが祖父母のケアです。両親も祖父母のケアもそこまで内容は変わらなかったのですけれども、同じような悩みで就職だったり、周りに相談できない、終わりの見えない介護をどう捉えればいいのかとか、いつ妊活ができるのかといった悩みが聞こえてきました。

もう一つが、きょうだいのケアです。ここも当事者に書いていただいたものをそのまま載せたのですけれども、きょうだいのケアで悩んでいる方は、仕事の悩みというよりは、感情的なところとか、相談する人がいないとか、周りに言えないという悩みを抱えている方が多かったです。

次のページをお願いします。僕がYanclerとして活動してきたことを簡単に御説明させていただきますと、介護経験のある転職エージェントが働きながら介護をする若者の転職支援をするというモデルだったのですけれども、その介護をする若者が、例えば一般の転職支援の人に相談しても、介護をしている生活をなかなか酌み取ってもらえなくて、そんな甘えたことを言うなみたいなことを言われてしまうという経験が僕にもあるので、ちゃんと介護をしている生活に寄り添って、家族の状況を鑑みて、それでも働ける企業を紹介するという活動をしていました。

具体的にいうと、企業は介護に理解があって、今は進んでいるのですけれども、フレックス制とか、在宅勤務制や時短勤務制でフレキシブルに働けて、社長とか人事の人が介護に理解を示してくれるところにおつなぎしていました。コミュニティーを運営していて、そこから仕事に困っている人もちよくちよく出てきて、その方の相談に乗りながら就職のあっせんというか、支援をしていくことをやっていました。

最後になりますが、ヤングケアラー、若者ケアラーの支援に必要なことを簡単に書かせてもらったのですけれども、ヤングケアラーは、学校と家の往復になるので、家で困っている以上、学校で発見してあげて、必要な人に福祉のアクセスをし、必要な人に相談先を設置して心理的ケアとかを行ってあげることが大事だなと思っています。

もう一方の若者ケアラー、18歳以上40歳未満ぐらいまでは、相談先の設置と、当事者同士のつながりをつくることで解決できる部分も多いのかなと思っています。あとは企業の意識改革を行って、介護をしている人を取り残さない就労環境というか、労働市場をつくっていく必要があるのかなと思っています。

長くなりましたが、以上となります。ありがとうございます。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございます。

続きまして「こどもびあ」の坂本様、よろしくお願いいたします。

○坂本氏 よろしくお願ひします。

では「精神疾患の親をもつ子どもの立場の体験から、考えられるヤングケアラー支援について」我々「こどもびあ」からできる限りお伝えしていきたいと思っております。

私は、坂本拓と申します。よろしくお願ひします。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。

精神疾患の親をもつ子どもの会「こどもびあ」という団体に所属しています。2018年1月21日に立ち上げをしまして、今年で4年目になりました。精神疾患の親を持つ子供の立場が主体となり、運営しています。集まれる場、語れる場、つながれる場を継続してきて3年になります。東京から始まった会でしたが、現在では大阪、札幌、福岡、沖縄と活動の幅を広げています。

私は「こどもびあ」の代表を務めさせていただいています、坂本拓です。ふだんの仕事は、社会福祉士、精神保健福祉士として、精神障害者の地域生活支援を行っていて、また、みんなねっとの理事として活動しています。

母親が鬱病、パニック障害を抱えていまして、精神疾患の親を持つ子供の立場として活動を続けています。名前や顔を公表して、母親との体験を発信しています。

まず、精神疾患の親を持つ子供の立場の体験談を簡単に少しお伝えさせていただきます。

まず、私の体験です。僕の母は、僕が中学2年生の頃に、恐らく鬱病かパニック障害を発症したと思います。ただ、病名を告げられたのは、僕が高校生の頃に母に言われたので、大体この辺から母の体調が悪くなっていったかなと思っています。もともと明るくて、元気で、力強いお母さんだったのですが、だんだん笑顔が減り、家の中でも暗い表情で過ごす日が多くなって、仕事もいつの間にか辞めていました。そんな母の変化には、僕も子供ながらに戸惑うものが多かったです。

母が体調が悪くなって、家にいることが多くなったときに、自分に何ができたかなと思うと、僕は母の話聞くことだけでした。ヤングケアラーの様々な役割の中にあるものでいうと、僕は感情面のケアを続けてきたと思います。

ただ、母の感情面のケアをしていたかと言われると、すぐにぴんとこないものがあります。家に帰ると、お母さんは暗い表情で、暗い部屋でたばこを吸っていて、僕はそれを見て見ぬふりをして、自分の部屋に行くこともできたのですが、そんな母を見捨てるというか、見ないふりをして自分の部屋に行くこともできず、話を聞くしかなく、そうせざるを得なくて母の話を聞いていた面もあります。なので、そのケアを担ってきたと言われると、いまいちぴんとこない現状があります。

僕は大人になるまで、母のことは誰にも相談せず、誰にも頼らずきました。それは、僕が外に言い出せなかったのもあるのですが、母のために、母の状況を秘密にしておいたほうがいいのではないかと考えて、そういう選択を取ってきました。ただ、さっき宮崎さんがおっしゃってくれていて、まさにそうだなと思っていたのですが、そもそも説明の仕方

が分からなかったのかもしれませんが。

今日は、副代表の小林鮎奈さんにも来ていただいて、少し体験を語っていただけたらと思います。

小林さん、お願いします。

○小林氏 ありがとうございます。

私の場合は、小学校2年生の頃に母が統合失調症を発症しています。母は薬を飲まなくなることや病院に行かなくなることが何度もあって、再発を繰り返すことも何度もありました。

病気については、小学校6年生の頃に、父親に病名のみを伝えてもらいましたが、それが何か分からないまま、高校生の頃に自分で病気についてインターネットで調べて、自分で調べた中で、遺伝するという言葉とか家族の対応で再発する可能性があるという内容をそこから受け取って、結構ショックを受けたということが印象に残っています。

ケアという見方をすると、通院同行とか服薬管理と書けるのかなと思って書いたのですが、これも、これは大人になってから思えたことで、当時は、病気ではないと思っていて、薬を飲まなくなる母がいて、病院に行かない母を何とか説得して病院に連れていきました。やっと連れていったものの、精神の病気ということにとっても落胆してしまった母に対して、私が病院に連れていったことで、母は自殺してしまうのではないかとすら思ったりもして、このような心境であったので、ケアしていたと自覚を持つことはすごく難しかったと思っています。日々の家族の困り事に対して、何が適切で正しいことなのかというのを見つけることが大変だったと感じています。

○坂本氏 ありがとうございます。

ほかの立場の方もそうだと思うのですが、仲間の体験は、簡単に説明できるものではなく、すごく複雑な感情が渦巻いているかなと思っています。大人になってからも言葉にすることの難しさとか、そのときの状況や気持ちを思い出すこともすごく難しいので、もっと深いものがあるのではないかと我ながら感じております。

体験から見える特徴と課題を整理しました。精神疾患の親を持つ子供の立場は、誰かに相談・発信することは困難だと考えています。困難であった理由は、公言することを親に止められていたり、誰に言われるわけでもなく話をしてはいけないことだと認識していたり、そもそも親の身に何が起こっているのか理解できず、状況を説明できなかつたりと多様です。さらに、その状況で感じる複雑な思いを子供が言語化することは非常に困難なことであり、子供自身が諦めてしまう場合もあります。結果、孤立へとつながってしまうのではないのでしょうか。

大阪大学の蔭山先生と「こどもびあ」のメンバーで実態調査を行いました。「精神疾患のある親をもつ子どもの体験と学校での相談状況」です。これは「こどもびあ」に参加してくれた240名の方にアンケートを取って、120名の方が回答してくれました。今日はその一部を抜粋してきました。

「学校への相談歴」についてのアンケート結果です。赤い枠で囲ってあるように「相談したことはなかった」方は、小学校期で91%、中学校期で84%、高校生期で78%とほとんどの方が相談の経験がない状態でした。学校に相談しなかった理由としては、様々なものが出たのですが、大きく分類すると、青い枠になるかと思っています。「問題に気づかない」「発信することに抵抗がある」「相談する準備性がない」「相談環境が不十分」。あとは「恥ずかしいこと、隠すべきことだと思っていた」ということも精神疾患の社会的偏見が大きく影響しているのではないかと思います。

また、ヤングケアラーの調査報告書の「『ヤングケアラー』である可能性を早期に確認する上での課題」も一部抜粋して、我々の目線で見ましたものです。

「問題が表に出にくい、ヤングケアラーという問題を認識していない」ということを我々から見ると、精神疾患を抱える親に対してのケア内容がそもそも明確ではない。担っている自覚がない場合や、何か担っているものがあっても、子供自身で表現することが難しく、負担に感じていても原因を断定することが難しい。特に感情面でのケアで起こり得ることだと思っています。

例えばで体験を伝えています。親の顔色、体調をうかがって、親のかんに障る言葉を使わない、話をしない、行動をしない、地雷を踏まないようにしていたという子供の立場の方も多くいらっしゃいます。この状況で、子供はケアを担っている自覚が持てるのでしょうか。

家族会・自助グループの必要性です。全国から「こどもびあ」に参加してくれた子供の立場の方は、300名以上になります。18歳以上を参加条件にしていることから、18歳から60歳代と参加の幅は広いです。医療につながっておらず、精神疾患・障害と診断されていないケースも多く、仲間として受け入れています。多くの参加者から、長年誰にも話せず孤立していたのに、やっと仲間と出会うことができた。一人ではないということが分かり、みんな頑張ってきたのだと感じることができた感想をいただいています。

今まで誰にも話さず、分かってももらえとも思えなかった体験は、我々子供の立場では共通していることと見えます。大人になってからも生きづらさを感じている方が多く、将来、家庭を持つことへの不安も抱えています。子供時代の体験は、大人になってからも影響を及ぼすと思います。

そういった語り合いが実施できるのは、安心・安全な場だからこそだと思っています。我々「こどもびあ」は当初、安心・安全とは、同じ立場に限定された場だと思っていましたが、立場を問わず、耳を傾け、受け入れてくれると思える場なのではないかと思えてきました。同じ立場の安心感も大きな材料となりますが、根本的には後者だと考えられます。受け入れてもらえないだろう、分かってももらえないだろうと発信することをやめてしまう我々子供の立場の課題でもあり、そういった受け止めてくれる大人と出会えなかったことや、経験できなかったことも社会の課題ではないでしょうか。お互いの歩み寄りが必要だと考えます。

精神疾患の親を持つ子供の立場から支援を考えます。キーワードは、孤立を防ぐことが大切だと思っています。

大きく3つに分けました。子供が感じている様々な感情を受け止める場、大人との出会い。子供のケアにとどまらず「家族まるごと支援」の必要性。最後に、病気を学ぶ機会です。

1つ目ですが、子供が大人と出会う場を考えると、学校が一番に思い浮かびました。私たちは、学校で多くの時間を過ごし、学校が安全な場だと感じていました。学校で家庭のことを相談できれば、子供が抱える負担が軽減されます。問題を解決してほしい気持ちもありますが、ただ話を聞いてくれるだけでも大きな救いになります。

学校での相談の経験は、抱え込まずに誰かに助けを求める、頼る練習にもなります。その後の孤立を防ぐ経験になると考えています。親と距離を取りたいときに、子供が自ら避難できる場や、つらくなった際に助けを求められる、気持ちを受け止めてくれる場が地域に必要です。

2つ目です。親が支援を受けることで、子供の負担も軽減されます。親のせいで子供が苦勞しているという視点ではなく、親もまた苦勞している、支えられるべき存在ということ忘れてはいけません。病気を抱える親自身も、子供にケアしてほしいとは思っていません。頼るべき人に頼れるよう、親が使える社会資源、または子供が使える社会資源の情報が必要です。

支援者を拒む親もいるかもしれません。諦めず、どのようなアプローチができるのか、子供に寄り添いながら考えてほしいです。そのような時間のかかる支援をしやすい制度が必要と考えます。

これはヤングケアラーの実態調査報告書に載っていたことなのですが、親が世話を必要としているのに、福祉サービスを利用している人はたったの5%でした。医療機関につながったときに、家庭に目を向け、サービス導入につなげることが重要です。

最後です。病気を学ぶ機会です。親が抱える病気を子供が理解することが大切だと考えます。どういう病気で、どういう症状なのか、自分のせいではないと言ってもらえるだけで子供の負担は減ります。疾患の知識を得たことで、疾患と親を切り離して考えられるようになったと語ってくれた仲間もいました。

親が子供に病気を説明できるといいのかもしれませんが。うまく説明するには、支援者の協力も必要と考えます。親との対話で病気のことがオープンになれば、触れてはいけないことだと思わず、病気に関する話を話しやすくなるのかもしれませんが。

学校の授業など、子供の年代に合わせて、病気について学ぶ必要を感じます。また、精神疾患について、我々大人が学ぶことも必要だと感じています。

早足になってしまいましたが、御清聴ありがとうございました。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございました。

それでは、丹羽副大臣が到着いたしましたので、冒頭の御挨拶をしたいと思いますので、

プレスを入れます。少々お待ちください。

(カメラ入室)

○山口虐待防止対策推進室長 よろしいでしょうか。

それでは、山本副大臣から御挨拶をお願いいたします。

○山本厚生労働副大臣 皆さん、こんにちは。厚生労働副大臣の山本博司でございます。

「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム」の第3回の会議の開催に当たりまして、御挨拶を申し上げたいと思います。

今回は、当事者または支援者の方々のお話を伺いたいということでございます。先ほどは宮崎様、坂本様、小林様からお話を伺いました。この後、藤木様、尼崎市の黒光様、江上様から御発表をいただく次第でございます。どうぞ忌憚のない御意見をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

前回、実態調査の結果を御報告させていただきましたけれども、その後、多くのメディアにも取り上げていただきました。また、私のところにも大きな反響が寄せられております。また、このPTの取りまとめの内容についても、期待の声が寄せられておる次第でございます。

これまでPTで皆様から伺った内容を踏まえまして、現時点で私が考えますことを申し上げますと、例えば今はケアマネジャーや医療ソーシャルワーカーなどの専門職の方がヤングケアラーを把握できたとしても、それが問題であると認識していない、むしろ介護力と捉えているケースが多いと考えられるということでございます。また、他の福祉サービスにつなげることにつきましても、その意識がない、また、余裕がないなどの課題があると考えられます。このため、専門職の方々を中心に、ヤングケアラーの方々の概念や、適切な窓口につなぐことなどを研修していくことのみならず、こういった対応をしたことを、例えば報酬などで適切に評価していくことが重要であると考えております。

また、現行では、介護につきましても、ケアを受ける方への家事支援サービスはできても、子供に対する家事支援ができないため、例えばケアを受ける方への食事は作れても、子供の分は作ることができないといった課題もあります。無条件に認めることは難しいですけれども、例えば子供に対して扶養義務がある方がケアを受けている場合などに限定して、柔軟な対応が検討できないかとも考えております。

これ以外にも、前回お示ししました論点、課題に沿いまして、本日の御意見も踏まえて、次回、5月目途で取りまとめてまいりたいと思う次第でございます。

今日はよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございます。

続きまして、丹羽副大臣、お願いいたします。

○丹羽文部科学副大臣 文部科学副大臣の丹羽秀樹でございます。

今日も、第3回のヤングケアラーのPTにまた多くの方に御参加いただきまして、本当にありがとうございます。文部科学省といたしまして、全ての児童・生徒が家庭教育に左右

されずに豊かな学校生活を送り、安心して教育を受けられることが最も重要であると考えております。

前回のPTにおいて公表されましたヤングケアラーの実態に関する調査の結果につきましては、支援を必要とする児童・生徒が一定数いることが明らかになりました。これだけでも、メディアをはじめ、本当に多くの方々がヤングケアラーの存在について気づく非常にいい結果になったと思っております。家族の世話による重い負担のために勉強する時間が取れない、学校に通えない等、真に支援を必要としている子供を早期に発見し、また、スクールソーシャルワーカーを含む学校の教職員や教育委員会が連携しつつ、必要に応じて福祉による適切な支援につないでいくことが大切だと考えております。

本日は、様々な方からヒアリングをさせていただきまして、また、今後もその内容を受け止めつつ、文部科学省、厚生労働省としっかりと連携しつつ、必要な支援策を検討していきたいと考えております。

今日までいろいろと議論を聞いてきた中で、気づきと、気づいたことをつないでいくという2つのポイントが重要なと改めて思っております。まだまだ我々においても気づかない点がたくさんあるかもしれませんが、また関係者の皆様方から新たな視点で教えていただければ大変幸いですので、よろしくお願いいたします。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございます。

それでは、頭撮りはここまでとさせていただきます。

(カメラ退室)

○山口虐待防止対策推進室長 それでは、ヒアリングを続けさせていただきたいと思います。

続きまして、藤木様、お願いいたします。

○藤木氏 NPO法人インフォメーションギャップバスター理事・弁護士の藤木和子と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私は、障害や病気のある子供のきょうだい、具体的には、弟が耳が聞こえないという立場で一緒に育ってまいりました。

今回、きょうだいについてイメージを持っていただきたく、2分間の動画を見ていただけますと幸いです。英語の動画ですが、字幕がございますので、ぜひ御覧ください。お願いいたします。

字幕が出ていないのですが、まずは周りから思われていることということで、きょうだいに対する差別的な視線であったり、レストランなどで飛び上がった、暴れたりするのを見られるのがつらいということです。

(映像放映)

○藤木氏 以上になります。御視聴いただき、どうもありがとうございました。きょうだいの立場としては、大変共感する動画でございます。

続きまして、私の自己紹介を少しさせていただきたいと思います。

私は、聞こえない弟と育ちまして、現在は聞こえない仲間たちと一緒に家族について考える活動しております。

また、もう一つは、障害種を問わず、きょうだいとしての活動といたしましては、全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会は、55年以上前から創立・活動している会です。そして、3年前に仲間と立ち上げました「シブコト障害者のきょうだいのためのサイト」というサイトも運営しております。こちらは、きょうだいの立場の登録者が1,200名を超えております。

続いて、本日の内容ですが、私の体験を簡単にお話しさせていただいた後に、障害や病気のある子供のきょうだいとか聞こえない家族についての取組をお話しさせていただきたいと思います。

次をお願いいたします。本日お話しさせていただく内容は、狭い意味でのケアにはなかなか入り切らない問題もあるのではないかと感じております。いろいろなケースがございますので、私や多くの人のこれまでの悩みや経験等が次世代の役に立てば、大変うれしく思います。

では、続きまして、私の経験を少しお話しさせていただきます。

私は、3歳下の弟がおりまして、聞こえないということが分かりまして、まずは弟が難聴学級のある公立学校に通うために、引っ越しと転校を経験いたしました。また、今振り返れば、ケアとして思い出すものとしたしましては、通訳で、これはどちらかということ、こういうことを言っているという形で口の形や身ぶりでコミュニケーションの手助けをすること、そして、家庭教師と書きましたが、弟が耳が聞こえないので、授業で分からないことが非常に多くて、とにかく弟が学校に行けるようにというのが家族全体の必死な思いで、それもありまして、毎日一緒に学習面のサポートをかなり手伝っておりました。

ほかには、母の感情面のサポートです。こちらは、具体的に申し上げますと、母と担任の先生のやり取りや、母や親戚とのやり取りに関する悩みなどを母から相談されるというか、話を聞くことがございました。母が担任の先生に書いた手紙をこれはどうかなというふうに見て、いろいろと大人の事情といいますか、そういったものを子供のときからよく身近に感じてまいりました。この辺が今、思い浮かぶケアというところだったと思います。ただ、弟とは遊びやけんかもする仲であったり、母とのやり取りも家族の会話の一環としてあったわけで、ケアという意識は半々だった部分もございます。

今、思い返すと、この経験が自分の役に立っていると感じる部分もありますし、人によってはつらかったと思う経験と半々のところがございます。ただ、自分の経験がよかったなど今、少しでも思えるようになってきているのは、周囲から適切な支援を受けて、自分のことを振り返ることができたということが非常に大きいと思います。障害のあるきょうだいがいると、優しく育つ、思いやりのある子に育つという意識が強い方が時々いらっしゃるのですが、そうではなくて、逆に大人の汚い面といいますか、社会の難しい面を見てしまうと、逆に近いからこそ障害に対する恐怖感とか嫌な、ネガティブな感情が生まれ

てしまいますので、そこはケアで非常に大きな分かれ道となるかと思います。

それと、ケアとは少し離れるのですが、私の場合は、個人的には、弟に障害があったために、父が私に家業を継いでほしいという期待が非常に強かったのです。両親や周囲から言われたことが、弟の分も頑張るってという言葉だったのです。それが実際のケアより、24時間私をかなり縛るものでした。勉強も、部活も、弟のケアも、母のケアもとにかく全部必死でやらなければいけないと思っておりまして、今から思うと、120%で常に犬に追いかけるように走っていた子供時代かと思います。

加えて、周囲になかなか相談できなかったこととしては、先ほどの動画にもあったのですが、子供の頃から弟と一緒にいると、ひそひそ声、じろじろ見られたり、周囲や親族から私に対して今、家はどうなっているのという質問を受けることが非常に多かったのです。心配半分、興味半分というところがあったかと思うのですが、そのときに、母の態度等に関しても、親族が私に対していろいろな意見などを言ったりするのですけれども、それも少し聞き流しながら、へらへらとそうですねと言って流すぐらいで、もちろん、母に親族の人がいろいろと言っていたよということも言えませんが、どんどん自分の中にたまっていく、どう対応していいかわからないということがありました。

また、これは母が周囲からいろいろと言われていたことの影響がかなり大きいと思いますが、進路や結婚につきましても、小学校に入るか、入らないかのうちから、自分は親の言うとおりに、地元で家業を継がなければいけないのかとか、将来結婚できるのか、小学校低学年ぐらいからかなり悩んでおりました。20代後半でようやくきょうだいの会に参加することができたわけです。

次をお願いいたします。きょうだいの会に参加してみると、私と同じような悩みを持った人たちがいました。特に難しいのが進路となります。もちろん、自分から進んで医療や福祉、特別支援学校などの教員になって、すごく天職だと思っているきょうだいもおります。

その一方で、大学に入ったり、就職した後に、これは本当に自分のやりたかったことなのだろうか悩んでしまうきょうだいもいます。親から明確に進みなさいと言われた人もいますし、期待を読み取った人もいますし、あとは進路指導の先生からある種提案として、きょうだいに障害のある人がいるのだったら、医療や特別支援学校、福祉がいいのではないのと言われて、何となく進んでしまったという人もかなりいます。

また、結婚とか、それとつながるのですが、中高生からは親がいなくなったらどうなるのという悩みが私にかなり寄せられています。生活やお金の面倒を見なければいけないのという質問も受けておりまして、私としては、ほとんどの方は、障害年金等を受けて、お金の面に関しても、生活の面にしても、支援を受けながら自立していけるという生活はあると回答するのですけれども、その点に関しても情報がなく、非常に悩んでいる子供たちが多い印象です。

次をお願いいたします。ここで、改めてきょうだいという立場ですが、障害のある子供の支援をしているのは、間違いなく親、母親が一次的な存在なのです。私は二次的な存在

でした。ですので、なかなか見えにくいところがございます。

ですが、幼少期からかなり重い悩みを背負っています。先ほども親亡き後の負担と申し上げましたが、今回、きょうだい会の先輩の70代、80代の方にも意見を聞いたのですが、一言目に出るのは、きょうだいは一生だからねという言葉でした。まだ私も経験できていないのですけれども、幼少期から親がいなくなった70代、80代あたりで持つかもしれない不安まで持っているという状況があるかと思えます。

ですので、これは全ての人が悩んでいるというわけではないのですけれども、きょうだい会に来た人、私が出会った人に関しては、とにかくもっと早くこういったきょうだいの会に出会いたかったという声を強く聞いております。きょうだい会に初めて来るのは、大体は大学生であったり、30代、40代、50代、60代になって初めて存在を知ったという方もおまして、それはやはり遅過ぎるのではないかと感じております。

次をお願いいたします。続いて、今回の全国調査の結果について、非常に重要なデータだと感じております。

1点だけ申し上げますれば、やりたいけれどもできないことについて、世話に費やす時間が1日平均4時間という結果が出ましたが、やりたいけれどもできないことは「特にない」が最も多い回答でした。この点につきましては、今まで皆さんからも自覚がなかなかないという点があったということと、押しつけ支援はよくないと思うのです。ただ、とにかく必要なときに支援が受けられるように、相談先や当事者団体があるということだけは知っておいてほしいなと思えます。

次をお願いいたします。続いて「キコエナイ×キコエル家族」ということで少しお話しさせていただきますと思います。

こちらは1月30日に開催したシンポジウムで、聞こえない子供を育てる親の立場、そして、私と同じきょうだいの立場、さらに聞こえない親を持つ聞こえる子供という3世代の立場で開催しました。親の立場としては、今井絵理子参議院議員に来て、お話ししていただきました。300名超の参加がございまして、非常に高い関心がございました。

次をお願いいたします。具体的な話といたしましては、支援者（通訳）を空気のように求められるという話が非常に印象的でした。特に印象的だったのは、私は経験がないのですけれども、学童が一緒だったということで、放課後は常に四六時中通訳を続けたという話もありました。なかなか気づいてもらえないところがあります。なぜかというと、聞こえる、聞こえないというところで、聞こえる子供は聞こえるのだから大丈夫という意識が非常に強いと思うのです。

ほかには、聞こえない親を持つ子供の方からは、スーパーや銀行などで難しい内容の通訳をしていて、自分がうまくいかない、店員の人からも舌打ちをされてしまったり、大人がその場にいるはずなのに、なぜか子供に負担がかかってしまうという話がとにかく印象的でした。子供とはいえ、聞こえるということで、なかなか気づいてもらえない、大丈夫、任せればいい、支援者として見てしまうというエピソードだと思います。

その中で、学校の先生の話も幾つか出てきました。学校の先生が大丈夫と声をかけてくれたことで救われたという話が多くありました。逆に、声をかけてもらっても、君が頑張らなければいけないのだよみたいな先生については、少し距離を置いてしまったという話もありました。

続いて、当事者としての集まりの様子を少しお話しさせていただきたいと思います。

今、子供たちが集まる会をしております、こちらは保護者の方もどのような内容か知りたいということと、内容を保護者にも共有したほうが良いと思いますので、親子で参加していただいております。

これは小学校の参加者の声ですけれども「なんでいつもわたしがめんどうを見るの」「いつもママとっしょでうらやましい」「いつもママに手つだってもらっちゃだめ」いつも何があっても、「〇〇ちゃんは聞こえないのだから、我慢しなさいというのはやめて」という話であったり、「きょうだい間の平等とは何だろう」という話もありました。

これは私の弟からのメッセージなのですが、自分だけが助けられるのではなく、自分も助けて、協力してと言われたほうがうれしい」という内容です。

最後になりますけれども「『聞こえる・聞こえない』の前に『人間として』『一人の私として』見てほしい」。これは中学生の女の子のメッセージですけれども、非常に重要だと思います。

次をお願いします。ヤングケアラーからは少し離れてしまうかもしれませんが、病気や障害の有無であったり、生まれた順番、性別などを問わず、それぞれが自分の人生を生きる、または障害の有無にかかわらず、その人の形の自立、支援を受けての自立等も必要だと思っております。

支援策につきましては、まずはまだまだ知られていないということで、情報発信と啓発、そして教員等の子供に関わる専門家の方々への研修でありましたり、ヤングケアラーといってもとにかく多様ですので、多様なニーズに合った選択肢やいろいろなモデルを出せること、そして、現在、当事者団体につきましては、手弁当で行っていることが多いので、専門家の方々とは協力しながら確実な活動ができるように御支援をいただけましたら幸いです。

以上となります。ありがとうございました。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございました。

続きまして、黒光様、江上様、お願いいたします。

○江上氏 尼崎市の江上です。

では、最初に江上から尼崎市の現状について簡単にご説明させていただき、その後、具体的な事例については、黒光からご紹介させていただきたいと思います。

尼崎市ですが、平成30年度あたりから取組を始めておまして、他市よりも少し早いのかなという認識があります。

発端は、市のコミュニティーソーシャルワーカー、現場でいろいろな支援に取り組んで

いる職員から、活動の中でヤングケアラーに出会う、発見したときに、ヤングケアラーという課題が、尼崎でちゃんと言語化されていない、認識されていない。だから、福祉の制度などで家庭の状況が改善できても、ヤングケアラー本人の解決に直接支援をつなげることはできない状況があることから、海外のヤングケアラー支援の事例や日本の先進事例を探してきて、市内で勉強会をしたり、研修を実施したり、講演会を開催したりと、まず、問題と課題の周知・啓発から取り組み始めたところです。

令和元年、令和2年度と事例検討会や研修を教員向けにも実施したり、アンケート調査を市独自に実施したりという取組を続けてきています。

ただ、現場での活動から出発していますので、組織体制の整備などはこれからというところになります。支援体制の検討は、この5月から部局横断的な会議が初めて開催されるというところです。

今後ですけれども、今、ヤングケアラーを発見するためのアセスメントシートを作成して、学校現場などで早期発見につなげることができないかという議論をしています。学校だけではなく、いろいろな場面で使えるように、また、今、児童を対象にするのか、教員が使うようにしたものをつくるのかといった議論をしているところです。

市独自の取組としては、ゼロ歳から18歳までの子供に関わる課題解決や支援を一体的に行う「いくしあ」という部門をつくっています。子育てに対する不安や発達の課題の相談、あとは不登校、ひきこもりなどを、教育委員会の部門も加わりながら一つの施設で一元的に対応しているところです。

紹介させていただいたとおり、今、ヤングケアラーについては子ども政策部門を中心に対応しているのですが、これから福祉の重層的な支援体制の中での検討も含めて、福祉部門とうまく連携・調整して、包括的な対応のスキームをつくっていったらというところで、制度設計や運用は、これから、今年度に検討していくところです。

私からは以上です。

○黒光氏 尼崎市のスクールソーシャルワーカーの黒光と申します。

今回、私は、幼いきょうだいの世話をするヤングケアラーのケアの内容や気持ち、どんな影響を受けているかを代弁するために出席しました。

今からは、私がスクールソーシャルワーカーをする中で出会ったヤングケアラーが、私や学校の先生に話した言葉をそのままつないで代弁したいと思います。代弁の間は、画面共有はせず、終わった後にパワーポイントで支援者としての考えをお話しして、終わりたいと思っています。幼いきょうだいの世話をするヤングケアラーは、高齢者や障害のある家族の世話をするヤングケアラーより楽なように思われがちですが、子供が大人並みの育児を担うということは大変な負担で、人生に影響をすることを知っていただければと思います。

今からの主語の僕、私は、中学生の生徒の言葉とお聞きいただければ幸いです。なお、学校で働いているため、子供に物語るような口調になりがちなお許しください。

最初に、中学2年生の女子生徒のAさんの言葉を代弁します。

私の家は、母子家庭です。お母さんは仕事をしながら私たちを育てています。一番下の妹は赤ちゃんで、まだ保育所に入れていません。だから、お母さんは、昼間は家で仕事をし、夜は居酒屋のパートに行きます。

私は、学校が終わったらすぐ、荷物を置いて、お母さんから一番下の赤ちゃんを受け取り、下から2番目のきょうだいを保育所にお迎えに行きます。お母さんはパートに行きません。

お迎えに来ているのは、お母さんぐらいの年齢のママばかりで、輪には入れません。荷物をまとめて、1人は抱っこ、1人は手を引き、自転車の前と後ろに乗せて帰ります。雨の日は大変で、走り回る1人にかっぱを着せて、1人はベビーカーに乗せて、レインカバーをかぶせて、自分はベビーカーを押しながら、傘も差しにくくて、半分濡れながら帰ります。そんなところに、部活帰りの友達に会うと、とても恥ずかしいし、気まずいです。

帰ってからは、保育所の荷物からエプロンやスプーン、タオルなんかを出して、洗濯機を回してから公園に連れていきます。家だとすぐに退屈して、いらいらするからです。夕暮れの公園で、一番下の子を抱っこしながら遊ぶのを見守ります。塾に行く学校の人に見られるのが嫌なので、あまり見られないようにしています。特に、1年生のときに入っていた吹奏楽部の人に会うと、胸がきゅっと痛みます。地域のイベントで演奏していたのを見て、憧れて入った吹奏楽部でした。お迎えに間に合わないから辞めました。クラリネットは、結局覚えられませんでした。

暗くなれば、テレビを見ている間に、朝干した洗濯物を入れて、さっきの洗濯物を干します。その後、おやつを食べさせて、一番下の妹を座布団に乗せて、哺乳瓶をくわえさせています。その隙に洗濯物を畳んで、その後に宿題やテスト勉強とかをしようとするのですが、きょうだいが邪魔してきたり、何かをこぼしたり、泣き出したりして、全然集中できません。最初の頃は、少しでもまとまった時間が取れるように努力していたのですが、この頃は疲れてしまって、やる気が起きません。小学校のときの担任の先生に憧れて、自分も先生になると決めていたけれども、その気持ちは変わっていないけれども、しんどくて向き合えない自分がいます。この前は、妹に教科書に落書きされて、嫌気が差してしまいました。

ほとんど勉強もできないまま、9時半を過ぎて、お母さんが帰ってきて、夕食を食べるのは10時過ぎ。その後、お母さんと分担して、きょうだいたちをお風呂に入れたり、髪を乾かしてやったり、着替えさせたり、寝かしつけたりします。私の手が空くのは12時前ぐらい。ここだけが自分の時間で、携帯ゲームをしたり、音楽を聴いたりするのですが、いつも眠ってしまいます。土日は、お母さんは仕事とすぐ下のきょうだいのスポーツクラブの送迎でいないので、ほとんどの時間はきょうだいのお世話をしています。平日より長いので、本当にきついです。

部活を辞めてから、仲のよかった友達と距離が空いてしまいました。友達と話をして、

みんなは部活の話や、塾や、恋バナばかりで、話が合いません。笑って合わせているけれども、私には話せるネタがありません。休みの日に、みんなで梅田にかばんを買いに行こうという話も、一緒に行けないので盛り上がれず、独りだなと思います。

宿題やテスト勉強ができていないし、みんなは塾に行っているけれども、私は行っていない。夜が遅くて遅刻したり、きょうだいの病気で休むこともちょくちょくあって、成績はどんどん悪くなって、学校は面白くないです。

担任の先生と保健室の先生は分かってくれるから、学校へ行くと、保健室へ行って、話を聞いてもらっています。土日になるのが怖い。みんなにとっては、1週間が早いかもしれないけれども、私にとっては一日一日がすごく長いです。長過ぎます。

私は、小さい子供が好きです。かわいいと思います。でも、何ぼ好きでも、ここまでたくさんのお世話をしたら、しんどいです。

先生になりたいという気持ちは変わっていないけれども、遠くなり過ぎて、夢が見えなくなっています。お母さんに何とかしてと言ったけれども、大げんかになって、何も話になりませんでした。来年、3年生になって、高校に行ったら、きょうだいのお世話はどうするのだろうと不安に思っています。お母さんは相談に乗ってくれそうにないです。

次に、中学3年生の男子生徒のB君のお話をします。

僕のお母さんは、自慢のお母さんです。夜勤のある仕事を僕たちのためにいつもぎりぎりの体力で頑張ってくれています。仕事から帰ってきたら、疲れてばたんと寝てしまうぐらい頑張っています。たまに休みのときには、焼肉とかに連れていってくれます。それがとても楽しみです。

僕には3人の幼い妹がいます。みんなやんちゃだけれども、かわいいです。

朝はすごく忙しいです。お母さんは夜勤から帰っていないので、妹たちを起こすところから始まります。なかなか起きないし、起きても遊んで着替えません。何とか菓子パンなどを食べさせて、とにかく朝から大騒ぎです。牛乳はこぼすわ、けんかしているわ、保育所に持っていくコップが見つからなかったり、まだパンをかじっている妹を自転車の前と後ろに乗せて、1人の妹は、僕のズボンをつかませて保育所に歩いていきます。時々何か気に入らないことがあると、歩かなくなったりとか、泣き叫んだりするので、そういうときは、はあ、もううんざりやと思うこともあります。保育所の先生やほかのお母さんは親切です。前まで行けば、自転車から降ろすのを手伝ってくれることもあります。だから、保育所に行くのは嫌ではないです。それから家に戻って、遅刻して学校に行きます。きょうだいがぐずって遅くなってしまった日は、何か疲れてしまって、そのままゲームをして学校をサボることもあります。

学校に行けば、気の合う友達があります。今のクラスは、バスケ部が多くて、自分は最初、バスケ部に入っていたから、仲よしが多いのです。部活は家の事情で続けられなかったので、話が合わないこともあるのだけれども、そういうときはちょっと寂しいです。きょうだいのお世話の大変さとかを友達に話しても、分からないから、誰にも話さないです。

勉強は苦手ではないけれども、少し遅れています。妹たちが水ぼうそうに立て続けにかかって、2週間ぐらい学校を休んで家で見ていたのですが、そのあたりから特に数学と英語が分かりにくくなって、苦手感があります。1年のときは4が多かったけれども、この頃はほとんど3で、2もたくさん混じってきました。

保育所のお迎えはお母さんが行って、僕が学校から帰ったら、家にはみんないません。6時前にお母さんが仕事に出かけて、子供だけになります。きょうだいを見守りながらテレビやゲームをしています。一番下の2歳の妹でも、もう『荒野行動』や『フォートナイト』とかをしています。それからお母さんが作った夕食を食べさせて、風呂に入れます。それからゲームや動画を見て、寝るのはつい遅くなります。一人の時間が欲しいから、早く寝ろと言うのですが、言うことを聞かなくて、諦めました。寝るのが遅いから、朝、余計にばたばたするのです。熱が出たり、吐いたり、泣きやまなかったりすると、本当につらいなと思うこともあるけれども、自分自身は、家族が大好きで、楽しく生活しています。ゲームやYouTubeのおかげで大体のことは何とかなっていると思います。

担任の先生が、工業高校とかチャレンジできるよと勧めてくれるけれども、昼間の学校は保育所の送りがあるから無理です。夜のお世話は、おばさんが少し見に来てくれるらしいから、夜の学校にしようと思います。

僕の夢は金持ちになることで、医者になりたいと思います。まずは夜の高校に行って、その先のことは後でも間に合うかなと思っています。僕の親戚も中卒か高卒ばかりけれども、ちゃんと生活しているし、何とかなるでしょう。家族が一番大切で、そのためには、自分の進路は家族に合わせようと思います。

以上です。

次に、画面共有をして、支援者としてお話ししたいと思います。

私は、小中学校と兵庫県の定時制高校でスクールソーシャルワーカーをしています。その中には、たくさんのヤングケアラーがいました。

その中で、幼いきょうだいのケアをしているヤングケアラーに関わることは、実は少なかったです。それはなぜか。スクールソーシャルワーカーは、1つの学校に週1回の勤務。限られた時間の中で虐待や重い不登校など、表に大きな問題が出ているケースだけで手いっぱいです。

ヤングケアラーの中でも、最も支援につながりにくいのは、幼いきょうだいの世話をするヤングケアラーだと思います。それはなぜか。次にお話しすることに関連します。

次から、スクールソーシャルワーカーを「SSW」と省略させていただきます。「SSWとしてヤングケアラーと出会って気づいたこと」。自分ではほかの家族との違いが分からないので、苦しい状況を理解できません。年齢よりしっかりとふるまう癖がついていて、外から見ると、しっかり者のよい子に映って、何か助けてあげなければいけないという感じを受けにくいです。

それから、幼いきょうだいをケアするヤングケアラーの場合、ネグレクトや親の養育能

力との関係が深いです。今回は、違うものを選んだのですが、もっと重いケースがたくさんあります。そうすると、今回のような事例は、なかなか支援に結びつかないです。

あと、困っていても相談したくない。それは、家族を悪く思われたくないし、家族が大好きで、大切だと思っているからです。

あと、自分がケアしないといけない、あるいは家族だけで解決しないといけないと思っ込んでいます。これは、親も、子供も、社会もです。

このような傾向から、ヤングケアラーは、学校ではスクールソーシャルワーカーやほかの支援の対象に挙がりにくいのです。幼いきょうだいの世話をするヤングケアラーなら、気づくのは学校や保育所ぐらいになってしまうのですが、表面上、すごくよい子で、しっかり者に映るので、支援が届きにくいという現状があると思います。

そのほかにも、家族の幸せが第一で、自分の気持ちを優先することに罪悪感を持っています。

学校で友人との関係が弱くなってしまふ。部活や遊びに参加できにくいので、話が合わなかったり、輪から外れてしまったり、また、自分の家の話も友達には分かってもらえないという寂しさがあります。

あと、ケアの経験だけは豊富なのですが、安定した社会生活を送っている大人との時間が圧倒的に不足しているので、多様な経験をしていません。そのため、仕事のイメージが少なく、夢を持つことがなかなか難しいです。学習時間が取れないので、夢を持って諦めるし、意欲も下がりがちになります。

さて、昔の日本では、幼いきょうだいの世話をしているヤングケアラーがほとんどだったと思います。今と何が違うのでしょうか。それは家族の孤立だと思います。昔は、隣近所、親戚のおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さん。ケアをしていても、いろいろな大人との横のつながりがあった。助け合いの文化があった。現代の家族の孤立こそがヤングケアラーの孤立と孤独を生んでいるのではないかと考えています。

「事例から考える成功点と反省点」を軽く、簡単に述べさせていただきます。

「成功点」は、学校にスクールソーシャルワーカーという福祉の視点が入ることで、家庭環境も含めた児童・生徒の理解と支援のプランを立てることができました。

ちょっと割愛させていただいて「反省点」は、関係機関と支援プランを立てるときに、ヤングケアラーとしてのアセスメントができていなかった。これは、支援を受けることに罪悪感があるとか、支援が生きがいになっていることもあるということも含めてちゃんとアセスメントをして、支援を結ぶ方法を考えないと、ただ真正面から支援を進めても結びつかないし、子供の思いに寄り添うことができないと思います。

「SSWとして、元ヤングケアラーとして考える、ヤングケアラー支援策」です。

一番下の土台のところを御覧ください。土台は、育児や介護を家族や母親だけの責任にしない社会、家族を孤立させない社会にすることだと私は思っています。これはすぐにはならないことだと思いますが、ここが変わらないと、ヤングケアラー問題だけでなく、虐

待やひきこもり、不登校などの問題も減っていかないではないかと現場で実感しています。

また、その土台の上のところでは、ヤングケアラーと接する可能性がある人や機関が、ヤングケアラーの心情や傾向などについて、知識や理解を持つことが必要です。外から見て、困っていそうに見えない、支援を受けることに抵抗があり、家族をととても大切に思っているという傾向を知らないと気づくことができないし、結びつけることはできません。

その上の段になります。ヤングケアラーを見つけたときに、相談する窓口がないと、つなぎ先がありませんし、ケースの管理ができません。

それから、もしヤングケアラーということが分かって、支援を開始するときも、居場所になる地域の社会資源とか当事者団体が少な過ぎて、結びつけることができません。特に中高生が参加しやすい社会資源については、かなり少ない状況になっていると思います。

一番上の段です。学校という場所は、ヤングケアラーに一番気づきやすく、一番近くで支援できる場所です。そこに福祉の視点を持つスクールソーシャルワーカーが入ることによって、早くヤングケアラーの気持ちやニーズに寄り添うことができると考えています。

また、左から3番目の進路への支援が非常に大切だと思っています。ほかの生徒よりも早く取り組む必要があると思っています。なぜなら、家庭のフォローが少ないからです。

最後に、異なる分野の専門職が連携するとき、コーディネートや調整をするソーシャルワーカーがととても大切になると思います。

以上をもちまして、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございました。

それでは、質疑の時間としたいと思います。御質問のある方は、挙手をお願いいたします。

では、山本副大臣、お願いします。

○山本厚生労働副大臣 5人の皆様、大変ありがとうございました。本当にお一人お一人のヤングケアラーとしての体験や支援ということで、身につまされる思いで皆の胸が熱くなった次第でございます。

宮崎さんにお聞きしたいと思いますが、宮崎さんの15年間の介護体験を含めて、今、ヤングケアラーのオンラインコミュニティーをされているということでございますが、宮崎さん自身、家族のケアは当たり前のこととしてポジティブに捉えられる社会の実現を目指したいということで、今、そういう取組をされて、当事者支援、ピアサポート支援ということで、こうしたオンラインコミュニティーをやっていらっしゃるけれども、第2回目のときも、埼玉県の実例として、SNSを活用したサロンを今年度から検討していきたいと思っておりますが、こうしたオンラインコミュニティーの利点と課題、あとはこういう支援があったらもっと広がっていくのにとこの部分に関してはすごく大事だと思いますので、今、取り組んでいる部分の中で、課題とかメリット、逆に国からのこういう財政的な支援があれば助かるのか、そういったことも一つお聞きしたいと思います。

○宮崎氏 ありがとうございます。

利点と課題のところについてなのですが、利点でいいますと、場所と時間にかかわらず参加できるというのはすごく大事なかなと思っています。ピアコミュニティのリアルの方があつたとしても、家庭が忙しければそこに参加するのは時間的に難しくなつてきますし、東京みたいなところだったらいいですけども、地方に行くと、ピアコミュニティを探すのに遠くに行かなければいけなかつたりすると思うのですが、それがネット上でできるというのは、時間、場所にかかわらず参加できるので、そこはすごく利点だなと思っています。

課題につきましては、今、コミュニティを運営していても、中高生の参加とかは少ないのです。今、元高校生が1人と現役の高校生が1人いますけれども、それぐらいでして、それは自分がヤングケアラーだと認識していなかつたり、僕が先ほどお話しした介護をしていても、そのつらさが言語化できなくてアラートが出せていないということだと思うので、まずはヤングケアラー自身に気づいていただいて、そういう支援のサービスがあることを知るところにたどり着けないと、そもそもサービスがあつたとしても、あまり意味がないのかなと思っています。

国からの財政支援というところでいいますと、ヤングケアラーの方々の御相談に乗っていても、変な話、お金になることではないので、全国にそういう取組をされている方がいて、みんなボランティアみたいな感じでやっているの、そこに対して国から少しでも支援をしていただけるとありがたいかなと思っております。

以上です。

○山本厚生労働副大臣 ありがとうございます。

それと「こどもぴあ」の坂本代表にもこの点をお聞きしたいのですが、私も障害者施策の中で、特に精神障害の方々の家族会にも出させていただきながらお話も聞かせていただいております。今、精神障害の方は480万人ぐらいの方で、増えていらっしゃるんですけども、そういう中で、今、坂本さんが取り組んでいらっしゃる「こどもぴあ」の取組といたしますか、特に家族会、自助グループは、いわゆる孤立を防ぐということで「家族まるごと支援」の部分での「こどもぴあ」の取組はすごく大事だと思っております。

そういう中でも、なかなか支援に結びついていないという課題とか、今言ったような坂本さんが取り組んでいらっしゃる取組も含めて、何か課題とか、こんな形で国の支援があればいいということも含めて、特にSNSの活用も含めて教えていただければと思います。

○坂本氏 ありがとうございます。

我々が取り組んでいる中でよく思うのは、僕とか副代表の小林さんのように、顔や名前を出して母親なり、父親なり、家族の病気等の体験を語るということにいろいろと弊害があるかなと思っています。我々自身も家族が精神障害を抱えているということを外に言い出せない、言いづらいということや、理解されないのではないだろうかといったことがあると、どんどん孤立に向かつていってしまうということを感じると、メンバーの中でも体験を語れる人は一部かなと思います。

ヤングケアラーを知ってってもらうためには、知識だけではなく、体験的知識を普及していくことが一番だと僕は思っていて、その先には、子供たちが自分たちの体験を外に伝える言葉を知っていったり、話していいのだという気持ちの方向性がついたり、そういったことが必要なかなと思うと、知識を普及していくよりかは、我々大人になった体験者が体験を語っていく、それを子供たちに聞いていただける、子供たちが言葉にしていくのもすごく時間がかかっていくのですけれども、はっきりとしない曖昧な感情を大人が受け止めていけるような、お互いに理解を深めていく必要性があると思っています。

誰が悪い、誰がいいみたいな話になっていて、我々の体験を伝えていけると、どうしても加害者、被害者の話になってしまうのです。子供が被害者、親が加害者、親のせいで子供が苦勞しているという話になっていってしまうと、より僕たちが体験を語れなくなってしまし、病気を抱えている親自身もSOSを発信できなくなっていってしまうので、いろいろな受け手の制度を立てていく、窓口を設置していくのは、僕らはすごくありがたいと思っではいるのですが、もっと前段階の意識を改革していけるような、本当に幼少期から精神障害や心の病について触れる機会だったり、病気自体をオープンに家族の中で話せる場とか、そういう学ぶ機会だったりというものを10年、20年先を見据えて始めていくことなのではないかと思っています。

我々が横につながっていける経験は、同じ立場だからつながれているというのがあります。支援をしてくれる人や研究者の方、行政の方と歩み寄って話を聞いてもらえる方たちはいっぱいいるのですが、その方たちに自分たちの気持ちがどれだけ分かってもらえるのだろうか、そういった安心感が得られないというのが僕たちがすごく窮屈に感じている部分です。なので、僕たち自身も発信していく練習をしていかなければいけないし、受け止めてくれる人たちも学びを深めていっていただきたいというところです。

あと、僕たちは、今後は「こどもびあ」として、18歳未満の子供たちと出会える場所をつくっていきたいなと思っています。ただ、それには子供を守っていくような、安心できるような仕組みをつくっていかなければいけないので、もしかしたらそこに親の同意がキーワードになってきたりすると、精神障害を抱えている親御さんにどう理解してもらって、家族会というものが、例えば被害者の会ではないということ伝えていかなければいけなかったり、その辺に関しても子供に寄り添ってくれる大人、子供の気持ちや言葉を代弁してくれるような身近な大人との出会いとか、寄り添ってくれる大人の存在が必要と感じています。なので、僕は必要な支援や制度、機関よりかは、近所の人でも、その辺のおじさん、おばさんでも、学校の人でも、友達のお母さんでも、もっと身近な大人が子供に寄り添えるような普及啓発が今できることであって、それをずっと続けていかなければいけないと僕は感じています。

回答になっているか分からないですが、以上です。

○山本厚生労働副大臣 ありがとうございます。本当に大事なことだと思います。社会が変わっていかないといけないということだと思いますので、ありがとうございます。

では、藤木さんにも同じような質問になりますけれども、今、藤木さんのほうで、当事者団体との連携支援とか適切な対応と支援で、普通の聴覚障害の方は、そういう通訳といえますか、手話を含めて、違いは多々あるかと思うのですが、そういう中で、どういう国からの支援があったらいいのか、もしくはこういう部分が対策として必要ではないかということがあれば、教えていただければと思います。

○藤木氏 どうもありがとうございます。

まずは、障害種別ごとに異なる事情があって、それはそれなりに理解した方が相談に乗ってくださることが非常に重要かと思います。当事者である必要はないと思うのです。坂本さんもおっしゃっていたように、当事者だけが対応するのでは受皿が少ないので、それぞれの事情を分かってくくださる方がいらっしゃるということが必要だと思います。

また、障害種別だけではなくて、背景に対応した方がいらっしゃるということが非常に重要だと思います。私が基本的に相談に乗れるのは、ある種自分と近い体験をした方ではないと相手も私を信頼してくれないのです。逆に、自分と近い経験を持った当事者とマッチングをしていかないと、小さな一言で傷つけてしまったり、特に、対面だったらまだいいのですけれども、文章でかなり重い相談が来たときに、応援したい気持ちとか、傷つける意図は全くなくても、言葉一つですごく敏感になっていたり、やっとの思いで連絡をくれた方なので、一言一言が難しいなと感じているところが非常に大きいです。

あと、特に重要だと思っているのが、例えば対面のきょうだい会でも言えないような、お兄ちゃんや弟の第二次性徴期に対して妹や姉の立場の方が非常に苦しんでいる事例などがあるのです。それは対面のきょうだい会ではなかなか言えないので、匿名のSNSやメールなどで相談していただけて、そこは非常にいいと思うのですが、実際、どのように回答していいのか、どうやって受皿になったらいいのかということがまだ私も試行錯誤の段階です。話を聞いたり、共感したり、近くで相談できそうな場所の連絡先の情報はある程度紹介できるのですけれども、実際の受皿がとにかく足りない状況で、そこは当事者団体と専門家の協働であったり、国にかなり支援していただきたいと思っております。

なので、一番支援をお願いしたいのは、第一に広報。まずは相談先があるのだということであったり、相談するところといういいことがあるといえますか、相談のメリットや相談を勇気づけるような広報とともに、実際に相談をしてくれたときに失望しないような、適切な相談ができるような体制の整備かなと思っております。

以上です。ありがとうございます。

○山本厚生労働副大臣 ありがとうございます。

では、最後に、尼崎の黒光さんにお聞きしたいと思います。

今、江上さんのお話を聞かせていただきまして、尼崎市の取組は、本当に先駆的にやっていたらいいなと思いましたが、また、事例を通じての対応も大変参考になりました。

最後の支援策のところ、家族を孤立させない社会ということで、相談のところと当事者団体の居場所ということでの具体的な施策が出ておりますけれども、黒光さんとして、

例えば国や県、行政に対してこういう形での支援をしていただきたいとか、何か具体的な形のものがあれば、教えていただければと思います。

具体で言えなくても、今、ヤングケアラーとして、また、スクールソーシャルワーカーとして今、取り組まれている中で、何か伝えたいことがあればお教えいただければと思います。

○黒光氏 今、私が働いている尼崎では、社協とか地域課の方がすごく活発な地域なので、困っているヤングケアラーの子がいて、その子が例えばこういうものがあるから、おいでよとか、子ども食堂があるから、御飯を食べにおいでよという普通の誘い方では、見下されているみたいで行きたくないと思ってしまう子だったりすると、そうではなくて、手伝いに来てほしいみたいな形でつないだりということをするのです。そこに応えてくれる地域課とか社協があって、それはきっと市としてそういう活動をやっているというバックもあると思いますし、ちゃんとした建物があって、場所も提供していただくことがあると思うので、すごく恵まれているなど思うので、そのように本当に近いところ、学校からすぐに行けるような場所に居場所をつくっていくということがすごく大事だなど思っています。

時々、遠いところにも連れていったりはするのですが、行き帰りだけで大分疲れてしまって、また行こうということになかなかならないのです。なので、本当に地域の力を活性化するというところにこれからも支援をいただけたらうれしいなど思っています。

○山本厚生労働副大臣 ありがとうございます。私だけ申し訳ございません。

あとは皆さんのほうから。

○山口虐待防止対策推進室長 ほかはいかがでしょうか。

では、どうぞ。

○瀧本初等中等教育局長 失礼いたします。同席させていただいております、文部科学省の初中局の瀧本と申します。

皆さん方、お話をいただき、本当にありがとうございました。切実な体験、あるいは黒光さんが相談に乗っておられる子供の今の状況とか、本当に迫るものを感じました。

そうした中で、私は文部科学省ですので、皆さんのお話の中で、学校の先生に話を聞いてもらって救われた思いがしたという面と、たしか藤木さんからもありましたけれども、そういう面と逆の面と両方あったということで、尼崎市では、教員に対するヤングケアラーについての研修もいち早く始めようとしているということが先ほど江上係長からありましたけれども、学校にどこまで期待して、どこまで先生方にしっかりと理解していただきたいのかなという面と、最後に黒光さんからありましたとおり、多分、尼崎は少し先んじているのかもしれませんが、スクールソーシャルワーカーの全国配置を進めているとはいえ、現時点でいうと、全国的には、中学校1校と小学校2校があったとすると、重点的な地区はもうちょっとやっていますけれども、3校に対して週1回、3～4時間で何とか増やしてきたということで、スクールソーシャルワーカーの方がどれぐらいまで学校に長

時間いる必要があると思われるのかなという辺りを、学校に期待する者としては、黒光さんも含め、今日お話しいただいた皆さんからも一言でもいいですから、お話をいただけたらありがたいと思います。

もしお願いできれば、宮崎さんから順番にお願いできたらと思います。

○宮崎氏 ありがとうございます。

学校に期待する者としましては、まずはヤングケアラーの存在をちゃんと発見していただく。理解した上で見つけていただいて、適切な支援とつなぐということをしていただきたいと思います。

その上で、僕の個人的なお話になってしまうのですが、僕自身も高校のときに先生に相談したことがあるのです。母の事情があって、部活を休みたいのですという話を部活の顧問の先生にしたのですが、そうか、休めみたいな感じで終わってしまったのです。そこが結構ネックかなと思っていて、そこで何で家族がどうしたのかというのを聞いてくれなかったのだろうと今になって思っているのです。自分からはなかなか話づらいので、先生から突っ込んで聞いてくださらないと、多分、わざわざ話さないと思うのです。

ただ、学校の先生も家族のプライバシーを配慮して、それ以上踏み込んではいけないのだという思いも多分あると思っていて、そこら辺は、先ほど黒光さんもおっしゃったように、先生がヤングケアラーの気持ちだったり、そういったあまり言ってはいけない心とかをちゃんと理解した上で、しっかりとお話を聞いてあげる体制ができればと思っています。

○瀧本初等中等教育局長 ありがとうございます。

○山口虐待防止対策推進室長 坂本さん、お願いします。

○坂本氏 ありがとうございます。

僕の「こどもびあ」のメンバーの話を知っていると、学校の先生にずっと声をかけて心配してくれた先生がいて、長い月日をかけて隠したり、先生を拒否したり、そんな気持ちの不安定さもありつつ、でも、最終的にはその学校の先生に家の状況を伝えられて、自分が抱えているつらさを吐き出せたという経験が、大人になってからもすごく貴重な体験でしたと話してくれる方がいらっしゃいました。なので、学校は、すごく可能性のある場所だと思っていて、子供の何か担っているものを少しでも軽減させてくれたり、大人に頼ってもいいのだという経験をさせてもらえる場だったり、ただ、しつこく聞いてくれていい方向に行った子供の立場の方もいれば、しつこく聞かれ過ぎて嫌な思いをしてしまった子もいたりとか、すごく多様だと思っています。

なので、一概に先生はこうあるべきだというのは言い切れないと思うのですが、子供を気にかけてくれるということはすごく大事なことだと思うのと、その子供のペースを見極めてもらって、その子供に寄り添い続けていくということは大事なかなと思います。

例えば宿題をしてこない、学校にいつも遅刻してくるとか、そんな表面的な不良という

か、学校であまりいいものにつながらない行動も、その背景に何があるのだろう、もしかしたら家庭に問題があって、親御さんにほかの苦労があって、子供が何か担っているのではないとか、表面的なもので子供を評価するのではなくて、その背景に何があるかというの、子供とコミュニケーションを取って、学校の先生が見ていただくと、そこから相談につながったり、何か子供からの訴えにつながったり、いろいろなものがあると思うので、触れてはいけないものという認識ではなく、触れ過ぎても難しいのですけれども、配慮をしつつ子供に関わっていく。子供が抱えているものを大人が想像していくというのが大事なことかなと思っています。

ただ、学校の先生がすごく忙しいというのも僕たちは重々分かっているので「こどもぴあ」は「こどもぴあ」で、学校の先生が精神疾患の親を持つ子供の立場を少しでも理解してもらおうと思って、今、DVDをつくっている途中です。その体験を伝えて、学校の先生に理解してもらい、子供の背景に何があるのかというのを少しでもイメージしやすくしてもらうために、僕は僕らでできることを考えて動こうと思っていますので、学校は学校でそういう研修を設けたり、子供に対しての会議の在り方を見直していただいたり、そういったことをお互いにやっていると、いずれは効果が出てくるのかなと思っています。本当に学校の先生たちには感謝しています。ありがとうございます。

以上です。

○藤木氏 御質問ありがとうございます。学校の先生は非常に重要な役割を持ってくださっていると思います。

きょうだいの立場でよく話が出てくるのは、同じ学校に通っている場合に、何かあった場合に、障害のないきょうだいのほうに助けてと先生がヘルプを出してしまったり、自分と同じ学年の、同じクラスに障害のある子がいると、障害のある子の対応に慣れているから、ちょっとお世話をお願いねという形になってしまうことがあります。そういうことは避けていただきたいと思っています。私はあまりそういうことがなくて、いじめ等もあまりなかったのですけれども、学校は一人の子供として暮らせるというか、生活できるすごく貴重な場なので、まずは一人の子供として尊重していただければありがたいと思います。

あと、きょうだいの会でもあるあるネタといいますか、よく出てくるのが、学校の授業で作文であったり、道徳の時間に障害をテーマにする授業があったときに、みんなそれぞれいろいろなエピソードを持っています。その中で、作文に関しては、家族のことを書いてみたらと言われてうれしいお子さんと、そうではなくて、すごく嫌で触れられたくないお子さんがいて、授業のときも一緒なのです。そこが坂本さんのおっしゃるような難しいところだと思うのですけれども、できれば事前にその生徒に意向を聞いた上で、そのままそっとしてほしいのか、中にはみんなの前で話すことで自信が持てるようになる子もいるので、それは本当に個々に対応していただければと思っています。

そんなところで、以上です。ありがとうございます。

○山口虐待防止対策推進室長 では、黒光さん、お願いします。

○黒光氏 私自身も元ヤングケアラーで、学校の先生にめちゃくちゃ力づけてもらってきました。その力づけは、先生には家庭で困っていることは全然話さなくて、ただ先生が私を気にかけてくださっていたということが伝わっていたということなのです。だから、大人になっても、今もその先生の言葉に力づけられています。

学校で何ができるかというところなのですけれども、先ほども出ましたように、学校の先生は忙し過ぎる。なので、表に困り感がすごく出ていないケースに関しては、なかなか手が伸びないという現状があります。

ところが、学校の先生は本当にすごいのですけれども、これは助けてやらなければならないと思ったら、動いてくださるのです。ということは、ヤングケアラーがどのように困っているのかという知識は圧倒的に不足していると思います。なので、先生方に研修を受けていただいて、表に出ないヤングケアラーのしんどさを理解していただくということがすごく大事なかなと思っています。

あと、スクールソーシャルワーカーなのですけれども、おっしゃるとおり、時間が全然足りていません。なので、ほとんどサービスで動いているかなと思っていますし、時間も今、週に1回で1校に行けますけれども、予防的なこととか表に出ていないことまで関わろうと思ったら、最低でも週2回は必要だと思います。

あと、何でもおればいいというわけではなくて、スキルがすごく問題になると思うので、スクールソーシャルワーカーのスキルアップとか育成という部分についても力を入れていただかないといけないかなと思います。

よろしくをお願いします。

○瀧本初等中等教育局長 ありがとうございます。

○山口虐待防止対策推進室長 ありがとうございます。

ほかはいかがでしょうか。あまり時間がなくなってきましたが、もう一問ぐらいはできますか。

では、大体時間ちょうどになりましたので、ありがとうございます。

宮崎様、坂本様、藤木様、黒光様、江上様、すばらしい発表をありがとうございました。本日の発表を踏まえまして、本プロジェクトチームの取りまとめに向けて、さらなる検討を進めてまいりたいと思います。

次回、第4回は、取りまとめ案について議論を行ってまいります。詳細な日時や場所につきましては、事務局より改めて御連絡させていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、最後に、両副大臣から一言ずつお願いできればと思います。

山本副大臣、お願いします。

○山本厚生労働副大臣 今日は第3回目ということで、当事者、支援者の方、本当に貴重なお話をいただきました。

来月の取りまとめにしっかりと反映していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いたします。

今日はありがとうございました。

○山口虐待防止対策推進室長 丹羽副大臣、お願いします。

○丹羽文部科学副大臣 改めまして、今日は本当に貴重な御意見、特に経験談を拝聴させていただきまして、とても勉強になった気がいたします。

山本副大臣と一緒にあって、一人でも多くのヤングケアラーと呼ばれる子供たちに、我々大人が気づきの目線を持って対応できるように、これからも文部科学省、厚労省と一緒にあってまたしっかりと頑張っていきたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

○山口虐待防止対策推進室長 それでは、以上をもちまして「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム」第3回会議を終了いたします。

本日は、お忙しい中、ありがとうございました。